

スリランカのキャリアウーマンが今なお直面する課題

ウィンダヤー・ウェーラトゥンガ (スリランカ)

世界では様々な文化を背景に、男女の役割がその取り巻く状況に応じて形作られてきました。興味深いことに、各国の社会的、経済的、商業的環境が変わっても、男女の役割にはさほど変化が見られません。少なくとも、スリランカではそれが事実です。

スリランカの人口は約2,100万人です。そのうち、女性が占める割合の方が多く(51%)、また女性の識字率が高いために(94.6%)、スリランカでは女性の役割が重視されていると思うかもしれません。確かにこの国では、女性が労働力の一員とは全く見なされていなかった頃に比べると、大きな進歩を遂げています。今日では、若い女性も輝かしいキャリアを積み、職場で同僚の男性とも対等に渡り合いたいと考えています。法の下でも、女性と男性の平等な権利が保障されています。

しかし、スリランカの文化は家父長制が色濃く、それは現在もあまり変わりません。家事一切については女性だけの責任とされ、男性が手伝う場合は「好意でしてあげる」という捉え方をします。多くの女性が経済的に夫と同等の責任を果たしていますが、妻や母としてこなさなければならない仕事を、夫は適切に分担していません。

女性の役割について、社会がどのような認識を抱いているかは、メディアにはっきりと表れています。ローカルのテレビコマーシャルやドラマでは、女性はいつも家事、雑用や子育てばかりしているように描かれています。これは、女性は外で働いて収入を得ることに加え、専業主婦や母親と同等に伝統的な役割をも果たさなければならないというメッセージを伝えています。ジェンダー開発に関する幾多のプログラムが実施されているにもかかわらず、社会の規範や姿勢にはそれほど大きな変化は見られません。

もう一つの典型的な例は、育児休暇です。公的部門では、女性には84日間の出産休暇が与えられますが、父親に与えられる育児休暇はわずか3日間です。民間部門では、父親に1~2週間の育児休暇を与える企業もあります。しかしながら、生まれたばかりの赤ちゃんは色々と世話をする必要があり、それが全て母親だけの責任ではないということを、政府はいまだに認識できていないようです。

専門的な職業に就いていた女性であっても、家庭や家族から必要とされることが増えるにつれ、仕事を辞めて専業主婦になる選択をします。このことは、スリランカ中央銀行(CBSL)による2014年の年次報告書で示された、憂慮すべき統計結果を見ても明らかです。この統計によると、女性の労働力率は低下し続けて34.8%となっており、この地域の中でも二番目に低い値です。これに対し、男性の労働力率は74.6%です。一方、女性の失業率は6.5%で、男性の失業率(3.2%)のおよそ2倍です。

核家族の出現や急速な都市化とともに、夫婦は二人だけで子育てすることを余儀なくされています。「出産・育児は母親が担うべき責任」という認識に縛られ、結局は女性が仕事を辞めざるを得ない状況に追い込まれているのです。子供が成長し、仕事への復帰を望んだとしても、ブランクの壁が立ち塞がり、就職先を探すのが困難です。このようなことが障害となり、女性が経済的に自立して、この国の経済的価値を高める可能性や機会が妨げられており、結果として男女間に格差が生じているのです。

働く女性にとって、これとは別の問題も存在します。それは安全な住宅や交通機関が不足していることです(CBSL, 2014)。農村部の女性が仕事のために都会に出る際、安全で手頃な住まいを探すのが困難です。自宅から職場までは遠距離であるため、毎日通勤することは不可能なのです。

また、女性よりも男性職員の方が好ましいと考える雇用主もいます。彼らがその理由として挙げるのは、女性は現場の仕事をするのが難しい、正規の勤務時間を過ぎて残業するのが難しい、妊娠により休職せざるを得ない、というようなことです。したがって、いくら女性が男性と同等に教育を受け、資格要件を満たしていたとしても、女性であるという事実そのものが、女性の労働力参加の機会を制限しているのです。

経済的観点から見ても、これは重大な問題です。政府は国民に対し、無償で教育を受ける機会を平等に与えています。しかし、女性がこの国の経済的付加価値を高める活動に参加できなければ、この投資から期待どおりの利益を得られていないということになります。一方、労働力が減少していくなかで、この国は自らが定めた目標を達成することもできないでしょう(CBSL, 2014)。そのため、今述べたような問題に取り組み、より多くの女性を労働力に取り込んでいくことが、スリランカにとって急務となります。これに加え、今後ジェンダー平等を実現していくためには、時代の変化に即して進化すべき母親と父親の役割について、子供たちに正しく教育することも重要です。



スリランカ人の母と子



スリランカの大学卒業生